

私は豪傑主義の少年だった

マ
マ
京東美術學校教授 黒田清輝

私は初め赤坂小學校で學んだが、後に平河小學校へ移つて、十四歳の時卒業した。私と同時に小學校を卒つた男生は、二名で、一人は法學博士の高根義人氏、一人は住友鑛山所長の久保不二雄氏であつた。常時二三年下の級に巖谷小波氏が居つた。

考へて見ると今日同級の二人が出世して居るのも無理はない事で、其時代から二人共能く出來て、二人より一つ二つ年長じふさな私が一番成績が悪かつた。

私は天性畫が好きで、十二歳頃父が畫の教師を頼んでくれたから、學校の餘課には畫の稽古を勉めて居つた。半ヶ年ばかりも習つた頃であつたらう。今でも記憶して居るが、母に伴つれられて箱根を経て三島へ行つた事がある。之は三島神社の宮司が國からの知人しよとで、この宮司の勧めで行く事になつたのだ。季節は夏であつたから、多分夏期休暇を利用した旅であつたらうと思ふ。其時に沼津で河景色を水彩で描いた事を覚えて居るが、之が其頃の畫稽古の最終の作であつた。

如何どうして畫を續けて稽古する事が出來なかつたと云ふと、丁度其頃は鹿兒島戰爭の濟んだ時で、私共の幼稚な思想は英雄崇拜と云ふ事で燃立つて居た。で小學校の運動は専ら戦さの眞似、課外の稽古は擊劍と云ふ有様であつた。殊に漢學に重きを置いて平素の愛讀書とも云ふやうなものは靖獻遺言、興風集、振氣編と云ふやうなもの

であつた。

なんでも此思想は十六歳頃までも續いて繪畫などと云ふ柔弱な生活には堪へられないで、天性などと云ふ物には省みもせずたゞ英雄豪傑を慕ふと云ふやうな状態ありさまであつた。小學校を卒業すると、紀尾井町に居つた齋藤と云ふ先生の塾と二松學舎とに通學した。砥礪會と云ふ會を立て、詩文研究と豪傑思想を練つたのは此時だつた。

其頃、漢學ばかりでは上級の學校に入れぬと云ふ事に氣がついて、神田の共立學校と云ふ英語學校に入學した。最も此學校を選んだのは、小學校友達で砥礪會員であつた横山兄弟が此學校に居たからだ。此横山兄弟と云ふのは横山正太郎氏の遺子で、森有禮氏の甥に當り、森邸に居つたのだ。

此共立學校に一年ばかり居つてから、今の青山學校の前身なる築地の英學校に轉校したのである。此時までは何を専門にやらうと云ふ考へはなかつたが、大學豫備校に入らうとは思つて居つた。此頃の事であるが、私は西國立志編を読んで伊太利の志士ガリバルヂーの傳に酷く感服して、又豪傑思想が熾んになつて、男と生れた上は西洋の代議士(其頃日本にはなかつた)のやうなものになつて見たいと思つた。それには法律を修めないと駄目だと云ふので、初めて法律學を目的と定めた。

で其頃は法律と云ふと、佛蘭西が一番であつたから、法律を勉強するには、先づ佛蘭西語を學ぶ必要があつたので、私は英語をやめて佛蘭西語に移つた。之れは十七歳の時の話。

その翌年が明治十七年であつて、私はある機會で此年二月、佛蘭西へ渡行する事になつたが、無論目的は法律にあつたのである。

こんな風で、私は法律を目的として、佛蘭西に行つたのであるが、其法律學生が何うして畫を學んで來たかと云ふと、其動機は種々あるが、要するに佛蘭西に三年も居つて、年も段々とつて、自分の天賦の智能の程度と自覺すると云ふやうな譯になつて折角法律大學に入學して居つたにも拘はらず、斷然畫家にならうと決心したのであつた。

其種々の動機の内の一二を擧げて見ると、或る佛蘭西の法學博士と爭論して、裁判汰沙マサまでにならうとしたと。佛蘭西の政治家が悉く法律家と云ふ譯でなかつたと。法律學者になつても常識がなければ詮のないと。又政治家になるに必しも法律學の必要のないと。こんな事から法律學と云ふものに對して嫌氣が出て來たのであつた。

丁度また、其頃日本から畫の研究に藤雅二氏が見えた。之は元來私の好む所であつたから、同氏のために畫の教師の家で通辯をしてやつた。それから又、程なくすると、久米桂一郎氏が繪畫を學ぶためにやつて來られた。私は益々畫家の知己が出來で、畫の面白味と云ふものは、法律箇條の無趣味と正反對をして居つたから、それやこれやで、同じく世に立つならば、自分の天性に適したものに限りと思つて、遂に藝術家となつたのである。之が豪傑主義の少年のなれの果である。